



普及指導の現場から

No.9

相馬双葉漁業協同組合請戸地区における底建網導入に向けた取り組み

福島県水産事務所 新関晃司

背景

請戸地区は東京電力福島第一原子力発電所から北に約6kmの浪江町に位置しています。東日本大震災による東京電力福島第一原子力発電所事故の影響で、請戸地区の漁業者は全員が避難を余儀なくされているため、現在、近隣の真野川漁港に拠点を移し、漁業を営んでいます(図1)。このような状況下にあるため、請戸地区では、漁労作業に対する人手不足が大きな問題になっています。従来、請戸地区では刺し網を操業する漁業者が多く、網外しの作業等を家族総出で行っていました。しかし、避難生活により家族と離れて暮らす人もいるため、家族の力を借りることが難しくなってきました。そこで、請戸の漁業者は比較的漁労作業の手間が少なく、多くの水揚げが期待できる底建網に着目し、導入に向けた取り組みを行っています。

取り組みの状況

平成26年に「請戸底建網検討委員会」を立ち上げ、底建網導入に向けた活動をスタートさせました。福島県の漁業は、現在「試験操業」という制限された中で操業を実施しており、さらに、底建網は福島県海域で操業されたことが無い漁法のため、当面は「調査」という形で底建網の有効性を調べることにしました。

最初の活動として、まずは実際に底建網漁が行われている青森県や北海道において、操業方法を学んできました。請戸の漁業者にとっては、全く初めての漁法であるため、現地での経験は大きな刺激と勉強になりました。その上で、網を購入し(写真1)、請戸海域に設置し、漁業者自ら漁獲状況や漁労作業の負荷について調査を行いました。

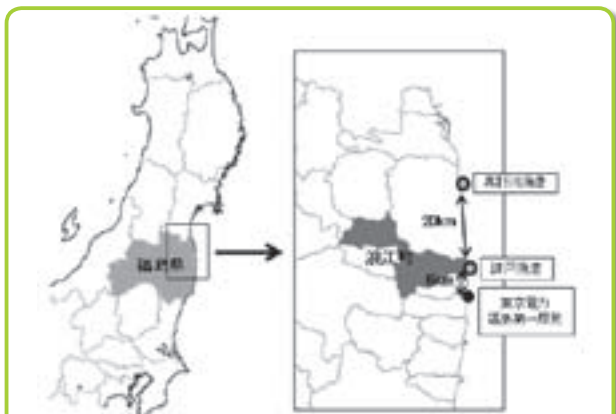


図1 福島県浪江町、請戸地区の位置



写真1 購入した底建網

底建網調査の結果

当初、福島県における新規漁法ということで、網の設置や揚網作業に苦慮する事態がありましたが、漁具の扱いに慣れるにつれ、スムーズな作業が可能となりました(写真2)。平成28年に実施した調査結果の1例を示します。この時は1網あたり、ヒラメ250kg、マアジ30kg、サバ類20kgが漁獲され(写真3)、5人の漁業者が1隻に乗船し、30分ほどで船上作業を終えました。刺



写真2 底建網の揚網作業



写真3 底建網調査で漁獲された魚

し網と比較した場合、わずか30分という作業時間にしては、十分すぎるほどの漁獲量だといえます。加えて、底建網の魚はほとんどが生きてまま漁獲されるため、市場に水揚げした場合、活魚価格で取引されるなど、鮮魚よりも魚価の向上が見込まれます。現在、底建網は特別採捕許可による調査のため漁獲物の販売はしていませんが、今後の展望が期待できる結果となりました。

今後の目標

平成27年から調査を開始して2年が経過し、漁業者の皆さんは底建網に対する手応えを感じています。特に、少ない漁労作業で鮮度の良い魚が大量に獲れることは大きな魅力です。さらに、底建網は、必要な量の魚だけを確認し、残りは船上で放流することが可能なため、資源管理の面でも優れていると考えています。

また、調査を通していくつかの課題も見分かりました。その1つは、福島県沿岸は単調な海岸線が続くため、波浪の影響を直接受けてしまうことです。実際に、海が荒れた直後に網を引き上げると、網が緩んでいて、魚がほとんど入網していないこともありました。今後は、このような海域に適した網の構造、設置方法を探っていく必要があります。

福島県の漁業は着実に復興に向けた歩みを進めています。今回紹介した底建網のように、今まで無かった新規漁法の着業を支援すること等によって、操業自粛により増加・大型化した資源を有効に活用する、福島県の新たな漁業のカタチを構築していきたいと考えています。